

海外医療事情

インドネシア - 看護師から見た日本との違い(3)

KAIKOUKAI CLINIC SENAYAN

小笠原広実

今回は、クリニックの外に目を向けて、日本で働きたいインドネシア人看護師や、インドネシアに滞在している日本人の元看護師たちの状況についてもお伝えします。

4. 日本との医療システムの違い

日本では、その時の症状によって、内科、整形外科、耳鼻科等診療科を選んで受診するのが普通です。インドネシアでは、GP (General Practitioner) がまず診察し、必要に応じて専門医につなげるのが一般的です。GP は、一般内科医、総合内科医などと呼ばれますが、かかりつけ医といった感じでしょうか。専門医の数はとても少ないです。

また病院にかかると、日本ではその病院所属の医師がいるのが普通ですが、インドネシアでは、一人の医師に3か所の病院の掛け持ちが許されていますので、患者が行ってもその時にその医師がいるとは限りません。日本人患者にとっては、不便だと感じるのではないのでしょうか。

日本で総合医というと、多くの診療科での経験が豊富で、患者の状態を部分ではなく、総合的にみて診断のできるベテランの医師です。インドネシアの GP (総合内科医) は、何年か経験を積み、その後に進学して専門医になりますので、日本の総合医とは異なっています。私のいるクリニックの GP は、患者の状態により、各専門医に気軽に問い合わせをして助言を得ながら、よりよい医療を提供しようと努力してくれています。



Puskesmas 保健所入り口



Puskesmas 保健所

インドネシアでも国民皆保険 BPJS が始まり、以前は貧しく医療を受けることができなかった層の人たちも、無料で医師にかかることができるようになりました。

しかし、日本の健康保険制度とは異なり、はじめに Puskesmas（保健所や保健センターのようなところ）の中にあるクリニックに行かなければならない、あるいは、病院に行っても、自由診療の患者とは待合室も分かれていて、受けられる医療の質やサービスに限界があるのが現状のようです。

5. 日本で働きたいインドネシア人看護師に向けて

日本とインドネシアの間では、2008年に経済連携協定（EPA）が結ばれ、インドネシア人看護師が看護師候補生、介護福祉士候補生として日本の病院や老人施設で働いています。2017年までにはすでに2,000人以上のインドネシア人看護師が日本に行っています。看護師や介護福祉士の国家試験に合格した人の中には、日本に残って働いている人もいます。また今後日本では介護人材が不足するという予測から、さらに外国人が介護の仕事をするために日本に行く道を開こうとしているようです。

インドネシア人看護師の間でも、日本で働けるのなら、新しい経験を求めて行ってみたいという関心はとて高くなっています。地方では、まだ看護師になっても仕事が十分でないという状況もあり、看護大学（4年間の学士課程と、1年の病院などでの実施訓練の計5年制）、看護学校（3年制）の先生方もどうしたら日本で働けるのか、という関心をもっています。いくつかの学会から、そのような話をしてほしいと講演依頼をいただいています。参加者から話を聞くと、“すぐに日本で看護師として働けるのではないか”



看護学生向けの看護講義の様子

“英語ができればいいのではないか”と考えていたり、“給与の金額だけ見て、生活費の高いことを考えていない”など誤解があるようです。正しい情報を伝えることも大切ですが、せっかくの機会なので、日本の看護で大切にしている考え方や高齢者の見つめ方の違いについて話をしています。

インドネシアでは、家族や親族のつながりが強く、病人や介護の必要な老人に対しては、みんなが協力して世話をします。それはとても良いことなのですが、病人や高齢者の方もそのように

人にやってもらうのがあたりまえになっているところがあります。自分の回復のためにできる力を使うという点が不足しているように感じます。

日本の看護師は、たとえ障害があり高齢になっても、その人が生き生きと自分の持てる力を最大限生かして生活を作り出せるようにと自立に向けて支援します。

はじめは、「かわいそうだから手伝ってあげたい」と言っているインドネシア人看護師たちですが、具体的ななかかわりの場面を話し、その老人が元気を取り戻した事例を話すと、そのような自立に向けた支援の大切さを理解してくれます。こういう考え方についても、少しずつ広めていきたいと考えています。

また私は公益財団法人日本アジア医療看護育成会（事務局 名古屋市）にも所属していま



EPA 出発前研修の様子

す。この財団では、EPA で来日したけれど期間内に看護師国家試験に合格することができず、インドネシアに帰国したが、もう一度試験に挑戦したいという看護師を支援する活動をしています。EPA 制度では、日本で何回でも再受験できるのですが、実際には渡航費や滞在費が高額で(看護師の一般の給料の 2 か月分以上が必要)、また日本語で国家試験の勉強を自力で続けるのは難しいことです。今までに、25 名(2013-2017 年)の支援をしてきました。看護師国家試験の合格は難しくまだ 2 名の合格のみですが、准看護師試験に合格して、日本で働いている人もいます。再受験を希望する看護師は、ほとんどがインドネシアで働きながら勉強をしたい方たちなので、月に数回週末に勉強会をしています。専門用語の難しい漢字は理解できる人が多い一方で、インドネシアの看護師の考え方と日本での考え方に大きな違いがあることにより正解できないこともわかってきました。また、日本では在宅での医療に移行する方向であり、地域でどんなサービスを受けることができるのかを知っていることも看護師の重要な役割になっています。しかし、日本の在宅の療養のイメージが乏しく、福祉制度や医療関係の法律について一から学ぶことは、インドネシア人看護師にとって、大きなハードルとなっています。

6. 家族帯同で来ている日本人の看護師に向けて

日本で看護師をしていた人で、夫のインドネシア赴任に帯同で来ている方が大勢いらっしゃいます。看護師の仕事を一度やめてきているので、また復帰できるのだろうか、と焦りを感じている人が多いようです。またずっと働いてきた人たちは、何かインドネシアでも役に立つことができればやりたいという強い思いを持っている方が多く、相談を受けることがあります。今年は、そういう人たちの集まる場として、キャリアアップにつながるきっかけになればと、グループを作りました。今 20 名の参加者で、2-3 か月に 1 回集まってミニ勉強会などを行っています。

また、日本アジア看護医療育成会 (JAMNA) の国家試験の勉強会にも、ボランティアで参加していただき、それぞれ得意分野の勉強を教えてもらっています。週末の開催が多いので、家族の都合などで参加がむずかしい人も多いのですが、無理のないように協力してもらっています。この勉強会を通して、インドネシア看護師の看護の役割や考え方の違いに気づ



JAMNA 再受験支援学習会の様子

いてもらえているようです。

ほとんどの方が 3 年くらいの滞在で日本に戻り、また看護師として働くことを希望されています。今後、インドネシア人の看護師が日本で働く機

会も増えていきますし、インドネシア人の患者が日本の病院を受診する機会も増えていくと思います。インドネシアと日本の看護の違い、生活や家族についての考え方の違いなどを理解した看護師が、今後日本の病院スタッフとの懸け橋になってくれるのではないかと期待しています。私が 20 年前にインドネシア生活で感じたことや学んだことが今生かされて

いるように、インドネシアで生活経験をした看護師たちが、将来国際的な視点で看護の仕事をしていくきっかけになればうれしいと思います。

7. 心の健康のために “インドネシアに来られる方へのメッセージ”

1) 声はかけ合い、あまりプライバシーに入り込まないように

どの国の赴任者にも共通していることかもしれないのですが、ジャカルタはとても狭い日本人社会です。大体日本人の行動する範囲（食事、飲み会、ゴルフ、ジム、習い事など）は限られているので、どこに行っても知り合いと偶然出会うこととなります。知らないと思う人でも、誰かの知り合いでつながったりします。特に仕事の関係から離れられない社会のように感じます。奥様同士も同様で、お子様がいるとその関係のつながりが深くなります。お互いの生活パターンや考え方を尊重するためにも、少し距離をとった関係も必要です。またそういう社会だと割り切って細かいことに気をかけないことも大切です。会社の上下関係をプライベートに持ち込まないことも重要です。

2) 仕事をしている人はインドネシア人従業員に対して、奥様方はメイドや運転手との関係でストレスを感じやすいようです。

たいていのインドネシア人は仕事よりも家族や自分の生活を優先しますし、お客様より自分の上司や同僚との関係を重視します。日本人には理解できないような行動も目にします。悪意があるわけではなく、価値観が日本人とは異なっているのです。日系企業で働くのなら、日本の働き方に従ってほしいと思う気持ちもありますが、なぜそれはだめなのか、どうすればいいのか、それをみた日本人がどう感じるか、などを一つ一つわかるように根気強く伝えていくことが求められます。

予測しにくい渋滞、大雨なども起こりますし、若い従業員の親が病気で倒れることもしばしばです。時間通りに進まない、急な欠席、急な予定変更を余儀なくされます。どのくらい臨機応変に対応できるかという自分の力を試されているような気がします。自分の思い通りにいかないたびにいらいらするのは、交感神経が優位に働き自分の健康状態にとって不利ですので、うまく心の動揺をやり過ごすことがインドネシアでは特に大切です。

3) 最近はインターネットに情報があふれています。20年前の滞在中には、日本人社会で Dengue 熱についての誤ったうわさが広がりパニックになったこともありました。今は、口コミに加えて、インターネット上のブログを頼りにする人も多くなっています。情報が入手できることで良い点もあるのですが、ときに誤った情報や勘違いした内容が含まれています。医療に関係する情報となると、とても心配になります。何かおかしいなと思ったり迷った時には、なるべく医療施設に質問をしてください。医療を受けた時の疑問は、その場で聞いていただくのが一番いい方法です。

また体調が悪い時には、よけいに心も落ち込みやすくなります。自分を追い込まないように、有意義なインドネシア生活を送っていただけることを願っています。